
異世界の世界と白の本

edenn

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界の世界と白の本

【Nコード】

N9894Y

【作者名】

eden n

【あらすじ】

あらゆる武器、魔法、道具、様々な力を具現化し生み出す力を持つ白き本、それを転生後に手にした青年と成長していく本の最強主人公の歩む魔法と剣の世界の物語

白の本

「本の52ページ、第三章、魔道弾と氷結の章火炎の章雷の章風の章土の章

解禁、死神の角笛発動！」

白色に輝く分厚い本を片手に青年は言う、本の中から骨のような姿をかたどった

角笛のようなものが現れ、それを少年は大きく息を吸い込んで大きく息を吹きかけた。

同時に角笛の中央から赤青緑黄色水色と順にシャボン玉のような丸い球体が現れ

深く生い茂った森の暗闇の中へと消え、数秒後激しい雷鳴と地響き、爆音が静けさに包まれた

森を包み込んだ。

少年はそれを見据え、背に背負った革袋を両手に持ち、

「捕獲口、標的を捕獲し、保存だ」

そういうと、青年は茶色の癖っ毛のある髪を掻きつつも袋を煙の上がる森の中へ補おった。

補おられた袋はしばらくすると、暗闇の方向から生きているようにして自ら動き

少年の手元に戻ってくる。少年は中に移りこむ無数の小さな魔物の姿を目にすると

わずかに頬笑み、呟いた。

「今日は大量だな、大地の恵みに感謝感謝」

軽い足取りで、青年は17歳ぐらいに見える背丈で踊りながら森を駆けていった。

その青年、ルイン・アルスタークは死神の森と呼ばれている魔物の多く出没する魔の森で一人暮らしていた。

ルインにとって森は庭のような物、しかし油断はしない。油断をしてしまえば、すぐに命を奪われてしまうから。

青年は数時間と森を進み、泉のある木の根元で足を止め両手を音を立てるようにして一度たたく。

すると、音とともに白色の本が目の前に突如現れ、それをルインは見て、

「21ページ、防御と守りの章、結界術について」

同時に言葉に応じるように白色の本は21ページ目を開き、結界術とタイトルの付いた覧が赤色の光とともに輝きを放つ。

「今日は結界陣でいいか、結界陣、レベル4発動」

声と同時にルインの体を中心として20メートル範囲に白色の光が膜のように広がり包み込んでいく。

それは20メートルきっかりに止まり、落ち着くと、青年は寝ころび

空を見据えた。

「もう16年か……長いようで一瞬の出来事だったな……異世界で森の中で暮らしてる俺を見たら

友達も親も誰だって驚くだろうな？　まあーいいや、どうせ俺は向こうの世界では

死んだ事になってるんだし、というか、実際に死んで埋葬までされたんだから

死人扱いだろうな？　まあー未練もなんもないからどうでもいいんだけど、ちよっと

俺を引き殺したトラックの運ちゃんにはむかつくけど、いまどうこう言っても仕方がない

俺はこうしてまた新たな人生を違う世界で前世の記憶を持ったまま生まれ変わった

わけだし、それに今は、前には無かったこの本の力もあるしさ、少し面倒なのは

俺には許嫁みたいな奴がいるって事くらい。いまこうして俺がこの森で暮らしてるのも

そんな許嫁の監視網から逃れるためだったりするんだけどね、若気の至りっていうか

昔はちよっとこの本の力を駆使して色々しちゃったからね……今思えばあの頃の俺は青かった……

綺麗だからかわいいからって言う事だけであんな約束するんじゃないかった」

独り言を長々と口にするルイン、その口はフクロウの声とともにいつしか消え、

ルインは眠りについたのであった。

そして、次の日の早朝、結界に侵入者が入り込んだ。

トラップも無数に発動するが、侵入者はいとも簡単にそれをよけていく。

それに反応するようにしてルインが深い眠りから覚めた瞬間、首筋にひんやりとした

冷たい剣が当てられる。

「アハハ……ミファエル騎士団長様、何年ぶりかな……」

剣の先には黄金色をした髪の美しい透き通るような白色の肌の女騎士が鋼の鎧を

身に纏い、鋭いまなざしでルインを見据えていた。

それにルインは額に嫌な汗をかいた。

それは向けられた敵意に流した汗ではなく、これから自分に起こる不幸を考えた結果流れた焦りの汗。

「ルイン殿、ここはおとなしく我々と一緒に来てもらいましょう。

6年前の落とし前をつけていただく」

「わざわざ、王女直属の女騎士殿が俺なんかのためにこんな辺境の森まで来るなんて

御苦労なこと……」

「それが、陛下に忠誠を誓った我らが役目、どこへなりとでも我々は陛下の

言葉のまま、言うがままに動くのみ、そして私は陛下の夫となるはずだった

貴行を殺したいほど憎んでいる私がいるのも事実、ここでいつもの事ここで

お前の命を奪おうともここへ来る道中考えていた。しかしそれはやはりできぬ

いくらお前がどうしようもない平和ボケした怠け者でも陛下の命令は絶対なのだからな」

「ははは、相変わらず俺の事を気嫌いしてるみたいだね」

「当たり前だ、6年前の屈辱、忘れようにも忘れぬからな！　とにかく

「お前は我が王国に連行する」

「ああ……面倒なことになった」

ルインがそういうと、女の部下と思われる兵装をした数人の男が
ルインの体を

縛り、馬に乗せ、ルインはそのまま女騎士の後ろで縛られたまま
森の暗闇の中へ

消えた。

許嫁と夜

うつすらと灯るランプの火の光が通路に伸びる中、ルインは古びた大きな扉の前で唾を飲み込んだ。

背後にはミファエルが不機嫌そうにルインの背中を眺めている。彼女は昔からルインの事をよく思っていない。

特にこの国の姫さまと口を交わし言葉を交わすことをあまりよく思っていないのだろう。

ルインはそのまま背後で尖った眼差しを送ってくるミファエルを無視して固く閉ざされた

扉の先へとその足を踏み入れた。

扉をひと通り開くと、ルインはそのまま中へ入り、背後で扉が閉ざされる音を聞きつつも

その場に座り込み頭をかきながら月明かりの漏れる空間のベッドの上に声を上げた。

「あのさあー話はここへ来る道中ミファエルからひと通り聞いた。

お前は病気なんだって？ お前みたいな凶暴女でも病気になるんだな」

その声に反応するようにベッドに寝転ぶ赤色の髪をした小柄な水色の瞳をした少女

の丸い瞳とルインの視線が交わり、人形のような様相の美しい少女はすぐに顔を

背け、枕で顔を隠しおどおどするようにして声を上げた。

「凶、凶暴？ な、なんて失礼な！ わ、私はこう見えても……」
「お姫様なんだろう？ 前に聞いたって、てかお前にお姫様という肩書きがなければ」

本当に凶暴なだけのじゃじゃ馬娘だからな。神様に感謝しろよ？
お前みたいな

男勝りなそしてロリ子フェイスなお前に王女という肩書きを与えてくださったことにさ」

「な、ふ、ふざけるな！ わ、私の体は確かに幼いが……ま、まだ発展途上なんだよ！

それに世の中には私みたいな幼い体が好きって言う人も中にはいるんだからな！」

頬を赤色に染め上げて、何度も照れ隠しするようにして枕を何度もベツトにたたきつけては

ぶつぶつと何か言葉を発する可愛らしい少女を見据えてルインは微笑を浮かべつつも

両手を一度叩き、視界の先に白色の本を召喚する。

「まあーどうあれ、俺を旦那にしたかったらもう少し成長することだな。

ま、それも望み薄だけどさ」

「ウウウ、見ておれよ！ 余は必ずそなたの心をデレデレのホレホレにしてやるからな！」

「お前さ、その言葉本当に意味わかって言ってるのかよ？ てかどこでそんな言葉覚えた？」

少女は小さな体で腕組みし、自信満々に鼻息を漏らしつつ答えた。

「もちろん！ 王宮のメイドたちとアイシャたちからだ」

ルインはその言葉にため息と共に眉間にシワお寄せる。

「アイシャが絡んでるのかよ……ルナ、一つ忠告しとくぞ？」

身を一步引かせ、少女は口を開く。

「な、何よ」

「アイシャにだけは恋愛面の事や男の事を相談するなよ？」

「どうしてよ？」

「あの女が、男喰いの魔女だからだよ」

「男喰い？ ああ、入れ食いとか何とかなんとかいつもメイドたちと話してるこの事？」

「とにかく、アイシャには近づくな、絶対だぞ？ お前は今のお前のままでいいから」

アイシャ、それは魔女と呼ばれる薬剤師の女の事である。

アイシャと出会ったのは6年前、この王宮でルナと婚約を約束した頃の事だった。

紫色の長く伸びた髪にうっすらと白い肌の美しい女。それが彼女への第一印象だった。

そして第二印象は男に対して、Sで有ること、男を強いて強いて傷めつけることに

快楽を覚えるおっかない女、6年前まではまだメイドたちも内気で顔をあわせると

すぐにそっぽを向いてしまうような可愛らしい娘たちだったが、今はすでにその

初々しさもなくなり、どこか大人の女へと成長しているな、この王宮に入り

メイドたちの仕草や行動を見てそう思った。

多かれ少なかれ、それらメイドたちに影響を与えたのはアイシャ

に間違いはないだろう。

ルナだけはそんな女になって欲しくなかった。

今のままのルナのほうがルインは親しみやすく、気持ちが楽に違いないから。

もしも、今のルナにS気が混ざってしまったら取り返しの付かないことになってしまうだろう。

「そ、それは今の余が好き、という事か……？」

それなら、私もこのままの私でいてやらんこともないぞ？」

顔全体を赤く染め上げ、熱のこもった表情でそう照れるようにして言う彼女をルインは見据え頭をかきながら、答える。

「好きかと言われたらそうだけど、それは本当に好きっていうか性格的な問題って言うか、まあー性格は今のルナのほうがいいとにかくアイシャには汚染されないようによろしく頼むわ、で、今日は俺に風邪を治して欲しいんだったけか？」

「ムムム、そうであった、余は今風邪をひいておるのだ、あの何だっただかな？」

あれじゃ、あれ、風……」

「ああ、風邪薬ね」

「そ、そうじゃ、それじゃ！ 余がわざわざをルインを連れてこさせたのは

その風邪薬というやつが必要だと余は考えたからなのじゃ！ あの苦いのは

嫌いじゃが、治りが早くなるのはいいものであるからな。エツヘン！」

両腕を組みながら頷きつつそう彼女が言うと、ルインは7ページ

を開き、薬の欄を

手でなぞりながら、目的の物を口にする。

「風邪薬、お子様タイプ、まあこれでいいか」

そう言うと、文章が緑色に輝き、小さな粉末の入った紙が現れ、それを

足早にベットに座り込む少女に手渡し、飲ませると、近場にあった水桶の水を

一口飲ませ、ルインはベットに腰を添え、小さな少女の頭を撫でながら言う。

「風邪の他にも何やら厄介ごとを抱えてるみたいだな、正直なところ俺を無理にでも森から連れだした理由は風邪薬なんかじゃなくて、もう片方の

問題の事が大きく関わってるだろ？ ミファエルのやつがたかが

風邪ごときで

俺をお前に合わせるわけないしき、言ってみろ。俺の役に立てることがあったら

許嫁のよしみで、聞いてやる」

小さな体の少女の髪を撫でながら、少女が目をつむりルインの肩に寄りかかるようにして

体を動かし、つぶやくように言う。

「そうじゃのおー明日になれば遅かれ早かれそちの耳にも入るだろう。

だから言っておく、余はもしかすると、ソチではない殿方と結婚するかもしれん」

「結婚？ 以外だな、俺以外にお前を妻にしようとする物好きがい

たのか」

それに彼女はルインを睨みつけ今にも泣きそうな表情で答える。

「余はそち以外の男とは決して結婚などせぬ、そう、そう決めておった

だが……余は一応はこの国の王、いつまでもそちを待っているわけにも行かぬ、

余は別にいくらでも待てれるのだが、貴族たちの移行もあり急遽、明後日の朝より闘技場にてとり行われる大会で優勝したの者が

余との婚約を許されるという条件が浮上した。余にそれを拒むことは許されなかった。

だからこそ、余はそちを呼び寄せたのだ、余のために余の許嫁として

余を助けて欲しい」

「助けはするが、それで突然結婚とか言われても俺は絶対結婚しないからな？」

それだけは覚えといってくれよ？」

「わかった……」

「ま、明後日のことは俺に任せとけって」

「うん……」

「今日は体を休めて、眠りな、俺がそばにいてやつから」

「ありがとう……」

少女はそう言うと、体を背後へ倒し、そのまま猫のように丸まって動かなくなった。

ルインはそんな彼女に布をかぶせ、そっと見守るようにして近場にあった椅子に腰を落ち着かせた。

稽古

アルディアル王国、4つの国々の存在するジグスターリアの大地にある大国の一つである。

かつてそう文献でルインは読んだことがあった。

アルディアル王国は国王亡き後、一夫一婦制の元生まれた娘、アルイス・アルナ・ルナ

がその王位を受け継いだ。しかし若干10歳の少女にとって国の事や民の事を考えることなど

できるはずもなく、実際に政治ごとに介入できるのは16歳の春からと国の重鎮たちに

提案され、それを彼女は承諾した。

そして今年の春が、その日に当たる、彼女を利用しようと国のあちこちから

重鎮たちが集まり、息子、もしくは30歳未満の男たちがこぞって明日の大会に出場するのだ。

ルインはそれを阻止する、と彼女と約束した。
叶えてやりたいとも思っている。

ルインは日差しの漏れる噴水の湧き立つ王宮の広場で数人の兵士たちと稽古を行っていた。

互いに響く剣と剣の擦れる音と、兵士たちの荒い息遣い、それに相対して、ルインは汗ひとつ

かかず、余裕綽々と中央に青い線の入った剣をブンスカと三人の兵士たちに振るう。

剣は風を斬り、音を斬って、男たちの握る剣を空に弾き、同時に3本の剣が芝生に覆われた

広場の地面へ音を立てつつも突き刺さる。

「ルインさん……噂通りの強さですね。完敗です」

息を乱しつつ、地面に倒れこむ三人の男の一人がそう言うのと、ルインは空に剣を

振るい、鞘に剣を収めると、笑いながら答えた。

「噂？　どんな噂なんだ？　俺さあー6年近く王都に戻ってなかったらからそこらへんの
情報はとんと知らないんだよね」

額に汗し、20代半ばの若い兵士が、息を落ち着かせ、それに一息飲み込んで答えた。

「6年前、開かれた10歳から19歳までの少年少女たちの武芸大会、そこで若干10歳の少年が参加し、最終選考まで残り
ミファエル様との一騎打ちとなった時の信じられないほどの激戦を繰り広げた後

ミファエル様の鎧をすべて剥がし、哀れな姿にした勇者、それがこの王宮内で

語り継がれてきたあなたの噂です。僕はその頃はまだこの兵士ではなかったのです

実際の戦いは見ていないのですが、すごい戦いだったんでしょ？

隊長も

副隊長も武に携わる人達がみんな貴方の事を恵まれた武の持ち主たと言っていました。

そんなルインさんにこうして出会い、稽古をつけてもらったことは一生の思い出として

この胸に留めておきます。稽古ありがとうございました」

満面に笑みで、男は胸に手を当て、ルインの目を見据えて、お辞

儀をすると、左右に倒れ込んでいた

二人の男も立ち上がり、お辞儀をする。

彼の好意にルインは少し、ためらいを感じつつも眺め、言葉を返す。

「こちらこそありがとう、昔の感覚が少しは戻ってきた気がするよ
俺なんかのために稽古付き合ってくれて本当にありがとうな」

「僕達こそ、いい勉強になりました」

「ああ、そうだ、良い物を三人にかしてやるよ」

「良い物ですか？」

「ああ、少し目を閉じててくれないか」

「あ、はい……」

そう言うと、男たちは目を一斉に閉じる、それを確認すると
ルインは両手を合し手を鳴らす。

同時に白色の本が目の前に現れ確認すると、

「35ページ、剣術と体術の才能開花の章、初級編、中級編、上級編
それぞれをキープ並びにA級保存、なお、ここにいる三人の男以
外の人間が

この本を理解した場合、自動的にこの本は破棄、この世から消滅
する。

ま、こんなところか」

声と共に白色の本から3つの赤、青、緑の分厚く古びた本が現れ、
それを手に取る、白い本を収め、3つの本を中央に立つ目を閉じ
た青年に渡す。

「もう目を開けていいよ、後、君たちに名前を教えて欲しいんだけ

「どいいかな？」

目をゆっくりと開きうつろな目で青年たちは3つの本を見据えて、答える。

「えっと、僕はアルベルト、アルベルト・シュタイナーです」

中央に佇む茶色の短髪をした青年がそう答えると、左右にいた赤色の髪

と緑色の髪の青年が同時に答える。

「私は、シュレイン、シュレイン・クズリート」

「私の名前はリールス・グレイン」

二人の顔を見据えてルインは答える。

「その本を君たちに貸すよ、返すときは君たちが俺の武の領域に踏み込んだ時か

俺がその本を回収したいと思った時、君たちが俺の武の領域に近づいたと思ったら

自分でそれを俺のもとに返しに来てくれ」

「剣術と体術について？ 初級編、中級編、上級編ですか？」

「ああ、かなり君たちの役にたつと思うよ？ その本は特別だからね」

「特別と申されますと？ どのような？」

「まあー読んでみればわかる。後、その本をここにいる三人以外に見せることは絶対にしちゃダメだよ？ 消えちゃうから」

「え？ それはどういう意味ですか？」

「そういう意味だよ、君たちの他にその本を深く読み、理解したものが現れた場合

その本は燃えて消えてしまうからね。一言で言えば魔法の本だから僕の場合は絶対に守らないといけいよ？　もしも破ったらきつと後悔するかね」

「わ、わかりました」

「まあ、他人に見せちゃダメってことだよ要するにね、それほどその本は

特別のモノだから」

「そ、そんな大切なものをなぜ私達に？」

「稽古に付き合ってくれた礼だよ、どうせ君たち訓練をサボって俺の稽古に加わってくれたんだろ？　その礼でもあるし、まあー受け取ってくれ

それと大切にしてくれよ。きっと君たちの役にたつからさ」

「は、はい！」

そうして、三人は本を受け取り、其場を去っていった。

その背を眺めながらルインは一人つぶやくようにして言葉を吐いた。

「アイツら、多分化けるな、近い将来、再びアイツらの名前を耳にすることになるだろう。」

多分……て、どこかの師匠みたいな言葉を吐いてみたりしたけど、まあーあの本は

本当に特別だからな、あながち嘘ではないかも、俺の言葉」

噴水の安らぎをもたらすゆったりとした水音を耳に入れつつもルインは広場を後にした。

広場を抜けてしばらくのこと、ルインは思いもよらぬ存在と出くわしてしまった。

通路の角、見通しの利かない場所で、ラブコメのようにしてそれ

と出くわしてしまった。

赤色の大人びた下着が黒色のスカートの中からわずかにルインの目に飛び込み、

思わず目をそれから逸らし、立ち上がりながら、ぶつかった何者かに申し訳なさそうに声を上げた。

「す、すみません。お怪我は……」

そう口にした瞬間、赤色の長い髪を無数に糸で結んでいる青色の瞳をした

女の顔がルインの視界に入りこみ、同時に悪寒が全身を駆け巡った。

「あら、うーん誰だったかな？ 君、どこかで見たような……」

覗き込むようにして美しい容姿をした20代半ばに見える女がその声を上げると、

ルインは思わず顔をそらす、視線をそらす。一步後へと体を下げる。

その一步を女も同じように進み、距離を詰めてくる。

「うーん、誰だったかしら？ 確かにどこかで見たような……」

「ひ、人違いでしょう、俺、いや、私は今日始めてこの王宮に来たんですから」

と、軽い嘘をついた、ルインが知るかぎり、ルインの帰国を知っているのは極僅かな

兵士とルナとあの女騎士だけ、メイドたちももしかしたら知っているかもしれないが

とにかく、今はごまかして逃げるべきだと考えたからだ。

「ふうん、まあいいわ」

「え？」

「だから」

「何ですかその物乞いするようにして押し出された手は？」

「ホラ、見て、私の手、さっき転んで傷ついちゃたの、その賠償金として

400ルイナ払って、それで許してあげるわ、でも払わないって言うなら

私のコネを使ってあなつたを社会的に殺してあげる。

それが嫌ならホラ、早く出しなさいよ」

（こういう女だ、昔からそうだ、興味のない男からは絞れるだけ金を奪い

興味のある男は金持絞り性欲も絞る、そして最後には無気力症に追いやり

男をダメにしてしまう魔性の女、最悪だ、どうして俺はこうも運が悪いんだ……

400ルイナとかそんな大金俺が思ってるわけないだろうが！
てかそんな大金

持ち歩いてるほうがおかしいっての、ここはとりあえず……逃げ
る！

いや、多分地獄の果てまでも追ってくるかもしれないがそれでも
逃げる

じゃないと、俺はあんなコトや……こんな事を言いふらされて、
名誉も

地に落ちちゃったりして、この国にもいられなくなっちゃったり
するかもしれないから

だから俺は……）

「とりあえず！」

「ん？ 払う気になった？」

「ごめんなさい！」

素早くお辞儀し、足を走らせた。

「あ！ 逃げた！ こらあーまたんかい！」

女も加速し、ルインを追う。

その日、ルインは逃げ続け、ようやく彼女を振り切った頃には夜中の2時を回っていた。

その夜、深夜の王宮では不気味な女の声が一晩中響き渡り、ひとつの怪談が生まれる事となったのだった。

宮殿をさまよう女の亡霊、そんな噂が広まるのに時間はかからなかったと言う。

ルインはその声を聞きつつも、王宮であてがわれた客室の大きなベットの中心へと入り込み、その日の疲れを癒すのだった。

アイシャとワインの赤

うつすらと暗闇に落ちた世界を眺め、夜風に身を預けながら少女は城下町の仄かに光る輝きを恨めしそうな眼でそれをじっと見据えていた。

7年ほど前までは男を求めて街々を周り、日々男狩りに勤しんでいた。

彼女に得られないものはないとおもっていた。

金も心も自分が望めばなんだって手に入る。

そう思っていた。

だけれど、今日はその考えが打ち壊された、手に入らなかったのだ。

彼女、アイシャ・ルイニールの申し出を却下された。

勝負下着だつてつけて、風呂に入って髪も編んで、化粧だつてした。

けれど、あの男は、あの三流貴族の男はアイシャの誘いを断つたのだ。

ただ、舞踏会の時、気になって声をかけて、願わくば夜も一緒にと軽い考えで

誘ったはずだった。それは簡単に受け入れられ、男と朝まで共にするはずだった。

彼女の申し出を断る男など今までいなかったのだ。だからこそ自信があった。

世にいる男は全員手玉に取れると彼女は考えていた。

だが、今日初めて、男に敗北感を味わってしまった。

「なんなのよ畜生！ 三流貴族のくせに私の誘いを断るなんて

ああー思い出すだけでもムカつくわ！　グウアアア！」

アイシャは片手に握る瓶いっぱいに入った赤ワインをくちづけしグバグバと

一気に飲み始めた。口元にあふれる赤色の液体がポタポタと頬に沿って地面へと零れ落ちる中

背後から声が上がる。

それは王宮へ上がってから友であり親友の声だった。

「荒れてるわね……あんた。どうしたの？　男にでも振られた？」

声は徐々に近づき、アイシャの隣に立つと、テラスの窓越しに腰を預けると

再び声を上げる。

「へえーその顔からして、振られたんだ。あんたもとうとう失恋を経験したのね」

「うるへえーあの男がバカなのよ！　この私よ？　この私の誘いをけるような馬鹿男

もう興味なんてないわ、そもそも誘ったって言っても告白とかじゃなくて、夜の

お供としてさあー私が本気で恋する様な男この世に存在なんてしないわ、ケ、ああーあ

どっかにいい男いないかなあ……」

アイシャは頬を赤色に染め上げて、滑舌も酔いが回ってきたのか徐々に悪くなっていき、面白くもないのに笑いが漏れたり、意味もないのに

空にブンブンとワインの入った瓶を振り回したりと自分自身何を

やっているのか

わからないまま、テラスにあるテーブルに座り愚痴るようにして言葉を発した。

「あのさ、あのさ、あんたわどうなのさ？ この世にあんたみたいなメイドさん好きになるやついるとおもっての？　ぷふえー」

アイシャの前に座る、メイド服を着たメガネをかけた黒髪の女は桃色の口元を

わずかに動かし答える。

「あんた、飲み過ぎ、後、あんたみたいなのはよけいよ？　ちなみに言っとくけど私だって人並みにはモテるのよ？

まあ、あんたみたいにいつもいつも男に声をかけられるわけじゃないけどね」

「プファアアえ？　なんか言った？」

「はあ……本当にあんた酔ってるわね……まだ26でしょ？　若いうちに

お酒に潰れてたら肌荒れるわよ？」

「エ？　肌が荒れるって……それホント？　ホントのホント？　真実と書いてホントの事？」

酔いの回った頭が思考が、美容のことに過剰に反応し、前にたつ女にそう尋ねた。

「薬剤師なのにそんなことも知らないの？　常識よ？」

「え？　そうなのか？　穴だったわ、ゲフウ……」

頬に手を当てながら慌てるようにワインを釘いるように見据えアイシャは言う

「はあーあ、まあー飲み過ぎは良くないわ、そのワイン私が没収させて頂きます」

「ええ……」

ワインの瓶を彼女は素早く手に取り、足元に隠すようにして奪うと、

微笑し、アイシャの目を見据えて再び声を上げた。

「でも、こんだけ飲んでるってことは、やっぱその殿方のことが少しでも

気になることがあるってことよね？」

「気になるところ？　ないわよそんなの、ただあの男の笑顔がこそばゆいくてなんか、むかついたから声かけてみただけよ」

「ええーそれって少しおかしくない？　むかついたなら普通声は書けないでしょうに

なのにあなたはその殿方に声をかけた、つまりそれ以外に何かその男の方に惹かれるモノがあったってことなんじゃないの？」

「ないわ！　絶対に、あんな奴に私の心が揺れ動くわけないじゃない！」

（絶対ない……そんなこと……私の最愛の人はもうこの世界にはいないのだから……）

私の心を満たしてくれる人なんて、いないわ……絶対に）

暗く、冷たい瞳で、どこか寂しげな表情を浮かべ、アイシャはシエスタ・フロイナの

微笑む顔を眺めながらそう答え、そう思った。

「どうしたの？ いきなり大きな声出したりして、怖いわよ？」

「エ……と、とにかく私はあんな奴認めないわ！ それに今日は400ルイナの

金づるにも逃げられるし散々な一日なのよ、もうほっといて！」

「……どうしてアイシヤは本当の恋を認めようとしなの？」

「……」

彼女に言葉を返すつもりはなかった。

（誰も自分の事なんて理解しなくてもいい、自分は一人なのだから、今も、そしてこれからも……）

彼女は去っていった、暖かな羽毛の羽織をアイシヤの肩に載せて、去っていった。

アイシヤはそんな彼女の姿を見据え、夜の風を浴びながら、そのまま意識を失った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9894y/>

異世界の世界と白の本

2011年12月1日22時54分発行